

駒ヶ原下

長野県上伊那郡宮田村
駒ヶ原下遺跡発掘調査報告書

南信土地改良事務所
宮田村教育委員会



序

昭和53年度県営圃場整備事業に伴い、地区内にある駒ヶ原下遺跡の、緊急発掘調査を実施した。

この遺跡は、中央アルプスの主峰駒ヶ岳に源を発する大田切川の、左岸段丘上の駒ヶ原地籍にある。遺跡東端が国道153号線に接している。

この水田地帯を西から、三ッ塚上、同中、同下遺跡、三ッ塚古墳、鳥林古墳、駒ヶ原下、駒ヶ原南、滝ヶ原遺跡等、縄文前期から古墳時代に至る数多くの遺跡が連なる重要な地域であるが、上記の理由によって、発掘に依る記録保存の止むなきに至ったことは、誠に残念なことと云わざるを得ない。

詳細についての記述は、本報告書に譲るが、報告書の刊行にあたり、春まだ浅い残寒の頃から、発掘にご尽力を戴いた、調査団長友野良一先生をはじめ、調査員各位のご協力と、県教育委員会や、南信土地改良事務所等関係機関の皆さんのご指導に対し、心から謝意を表する次第である。

昭和54年3月 宮田村教育長 林 金茂

宮田村と駒ヶ原下遺跡(東から)



例　　言

1. 本書は、南信土地改良事務所の計画した宮田村圃場整備事業に伴う駒ヶ原下遺跡の調査報告書である。
2. 本文執筆は、友野良一・赤羽義洋・丸山やよいが行ない、目次の各項にそれぞれの文責を記した。
3. 本書に使用した写真の撮影は、友野・赤羽が担当した。
4. 資料作成では、石器実測を赤羽が、土器拓影は保科徳子が担当し、図面の作成は、保科・三沢 恵・丸山が担当した。
5. 本書の編集は、丸山が行なった。
6. 本遺跡の発掘調査は、南信土地改良事務所の委託により、宮田村教育委員会が調査団を編成し、実施したものであり、実際の発掘調査では下記の方々の協力を得た。

(1) 発掘参加者名簿

団長 友野良一・小木曾 清・田畠辰雄・赤羽義洋・丸山やよい
有賀君子・伊藤柳治・大沢 実・太田利雄・春日修一・春日 宗・春日松己・加藤大八
北沢武男・木下 進・小田切英男・小田切広子・小田切房子・小林文吾・小林喜男・小
松秀男・小松博子・小松二三子・白鳥あき子・墨矢勇夫・田中カズミ・田中義蔵・林美
弥子・平沢八千子・藤川周一・保科兼雄・保科徳子・保科義重・宮木芳弥・百瀬乙平

(2) 教育委員会事務局

教育長 林 金茂・森下 清・古河原正治・竹松正恵

目 次

I. 遺跡の概観.....	5
遺跡の立地.....(丸山)	5
地質・層序.....(丸山)	5
歴史的環境.....(丸山)	6
II. 調査の経過.....(丸山)	7
III. 調査の結果.....(丸山)	8
遺構の平面分布.....(丸山)	8
第1号住居址.....(丸山・赤羽)	10
第2号住居址.....(丸山)	13
第3号住居址.....(丸山)	14
ピット群.....(丸山)	15
落ち込みを伴うマウンド群.....(丸山)	18
出土遺物の内訳.....(丸山)	22
その他の出土遺物.....(赤羽・友野)	25
IV. 調査のまとめ.....(赤羽)	27
V. おわりに.....(友野)	37

I. 遺跡の概観

遺跡の立地

宮田村は、赤石山脈と木曽山脈にはさまれた、伊那谷を流れる天竜川の西岸にあたる。この天竜川西岸地域は、特有の「田切り地形」を形成しており、宮田村は大田切川と藤沢川とにはさまれた大田切扇状地上にある。今回調査された駒ヶ原下遺跡は、この扇状地上南端の小田切川と大田切川とにはさまれた駒ヶ原の段丘上にある。駒ヶ原の段丘は、東西に長くのびた西高東低の段丘であり、調査区標高は648~653mを測る。大正時代頃までは、一部畠地として利用されていた他は山林であったが、昭和の初めの耕地整理以後は、水田としても利用された。現在では、都市化の波が押し寄せ、宮田村の住宅街として、団地や住宅が建ちならんでいる。

地質・層序

大田切扇状地は2.5~4.5%の勾配で西高東低に傾斜している。班状花崗閃緑岩・縞状片麻岩・変光綠岩等の岩石が基盤となって洪積台地が形成され、この台地上に1~5mのロームが堆積したのが、その地質構造である。

下図の層序は、

I層…5~10cm、暗褐色の耕土層。 II層…18~20cm、黒色土層。

III層…35~40cm、暗褐色土層。

IV層…10~30cm、褐色土と暗褐色土の混じった弱粘性の土層。

V層…45~55cm、ソフトローム層であり、色調は黄褐色土（軟粘性）

VI層…駒ヶ原台地の基盤をなしている洪積台上部にあたる。



図1. 駒ヶ原下遺跡の位置

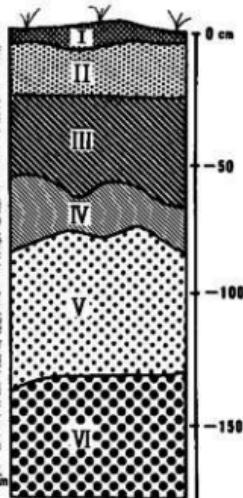


図2. 層序(1:20)

歴史的環境



図3. 繩文早期末～前期の遺跡分布

駒ヶ原下遺跡は、表採などにより昭和30年代の初めの頃からその存在が知られていた。採集遺物のほとんどが縄文中期土器の破片であったこと、遺跡東方にある滝ヶ原遺跡が昭和49年に調査され、縄文中期の住居址が発掘されたことから駒ヶ原下遺跡も同様の性格のものであろうと考えられていた。更に、昭和52年には、段丘南端にある駒ヶ原南遺跡を発掘し、縄文前期初頭の中越式土器を出土する住居址6軒が調査され、縄文時代前期の集落を考える上で、貴重な資料を得ることができた。そのような意味を含めて、この駒ヶ原の段丘上の今後の調査が期待されていた。

調査の結果、当遺跡からは縄文時代前期初頭の住居址3軒・落ち込みを伴うマウンド6基・ピット群などの遺構のほか、各時代の遺物が出土した。

周辺遺跡の分布状態として、このうち3軒の住居址が確認された縄文時代前期の遺跡についてふれてみたい。

1. 中越遺跡 大正末年に鳥居龍藏氏によってその存在が知られて以来、50年以上にわたって研究され、10回もの調査が行なわれてきた。丸底(尖底)で、簡単な沈線・粘土紐の貼りつけを典型とするいわゆる「中越式土器」を出す遺跡であり、昭和53年の10次の調査までで95軒の住居址が確認された大集落址である。
2. 駒ヶ原南遺跡 昭和52年に調査された。前述の前期の住居址6軒のほか、弥生時代の住居址・方形周溝墓等も発掘された。

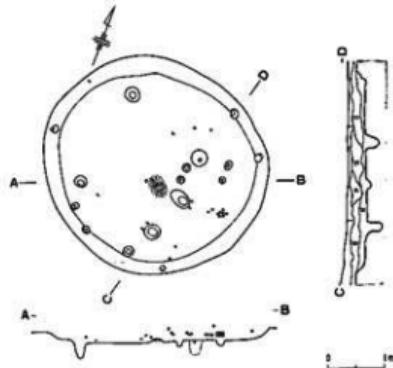


図4. 宮田村 駒ヶ原南遺跡 6号住居址

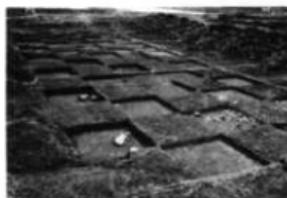
II. 調査の経過

昭和30年代の初めに友野團長がこの付近を踏査した際に遺物を採集しており、その存在は知られていた。遺物は縄文中期が多くかったことと、遺跡東方にかる流ヶ原遺跡の調査でも縄文中期の住居址が確認されたことから、駒ヶ原下遺跡も同じ性格のものであろうと考えられていた。

宮田村では、総合開発計画に基づき、昭和47年の古町・田中北両遺跡を端切りに、発掘調査があいついで行なわれた。昭和53年には、駒ヶ原の段丘上がその対象となつたため、やむなく、西方へ続く駒ヶ原カラス林遺跡、三つ塚古墳、三つ塚遺跡とともに、調査が行なわれる次第となつた。

宮田村教育委員会により、友野團長以下の調査団が編成されたのであるが、調査員もそれぞれの勤務についてのことであり思うにまかせず、その専らを小木曾調査員に負つた。

調査は4月1日より、調査区の設定をもって開始された。調査区には、8枚の水田があり、それを一つおきに4箇所、西からA・B・C・D地区を設定した。グリッドはA地区の西南隅をA-1とし、4地区を通じての番号とした。調査の方法は、発見された遺物を1点1点記録するという、遺物分布の状態をも調査する方法をとつた。発掘は4月28日まで行なわれ、住居址3軒・落ち込みを伴うマウンド6基、ピット群などを確認でき、成果をおさめた。



A地区



C地区



D地区

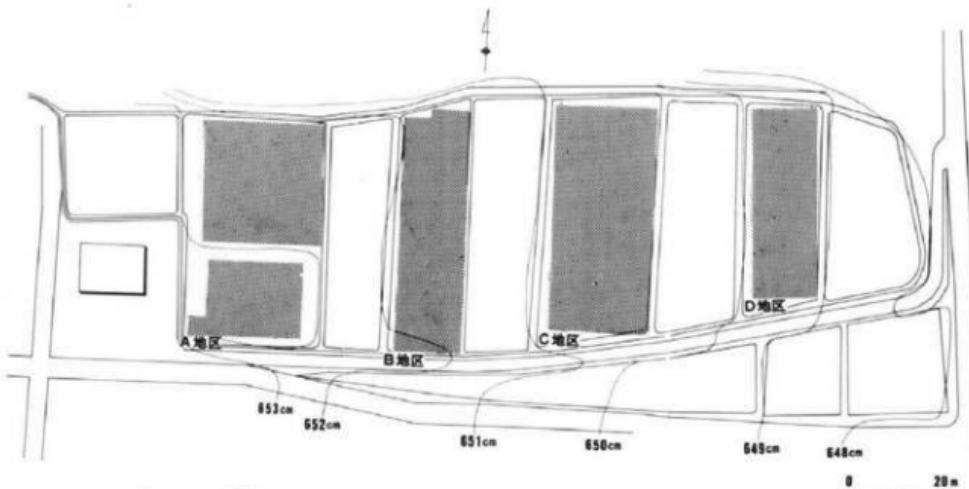
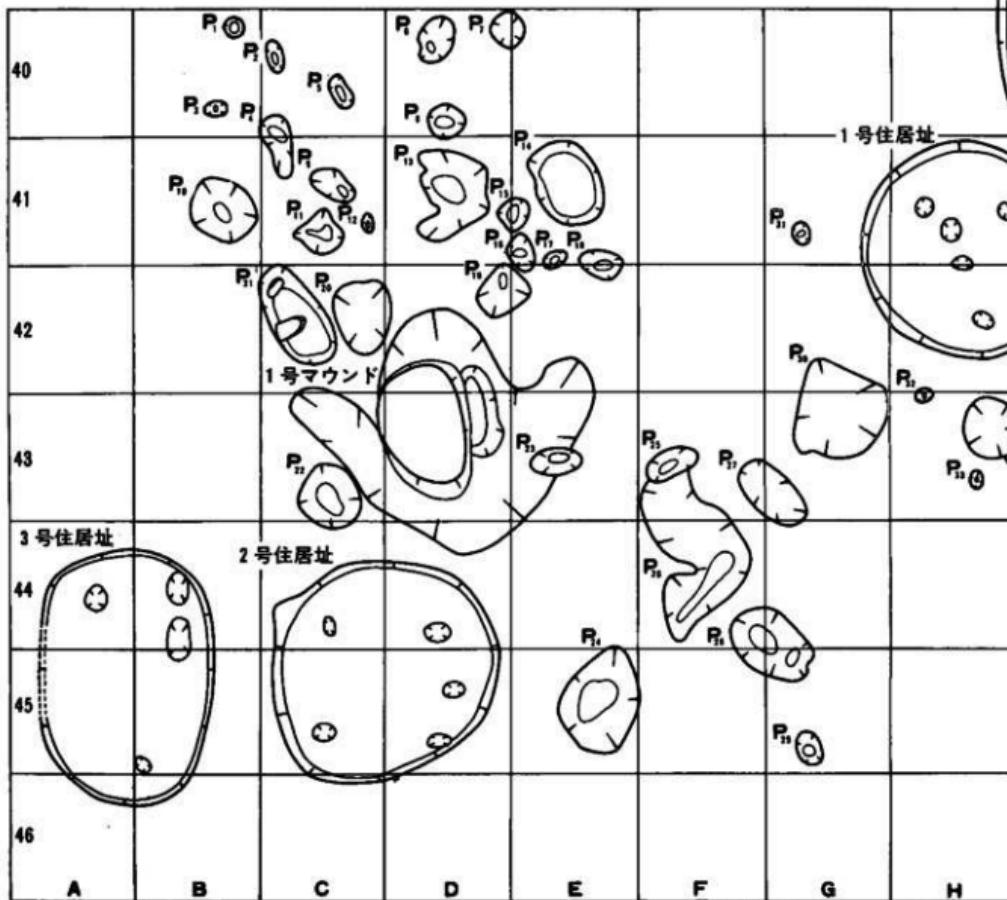


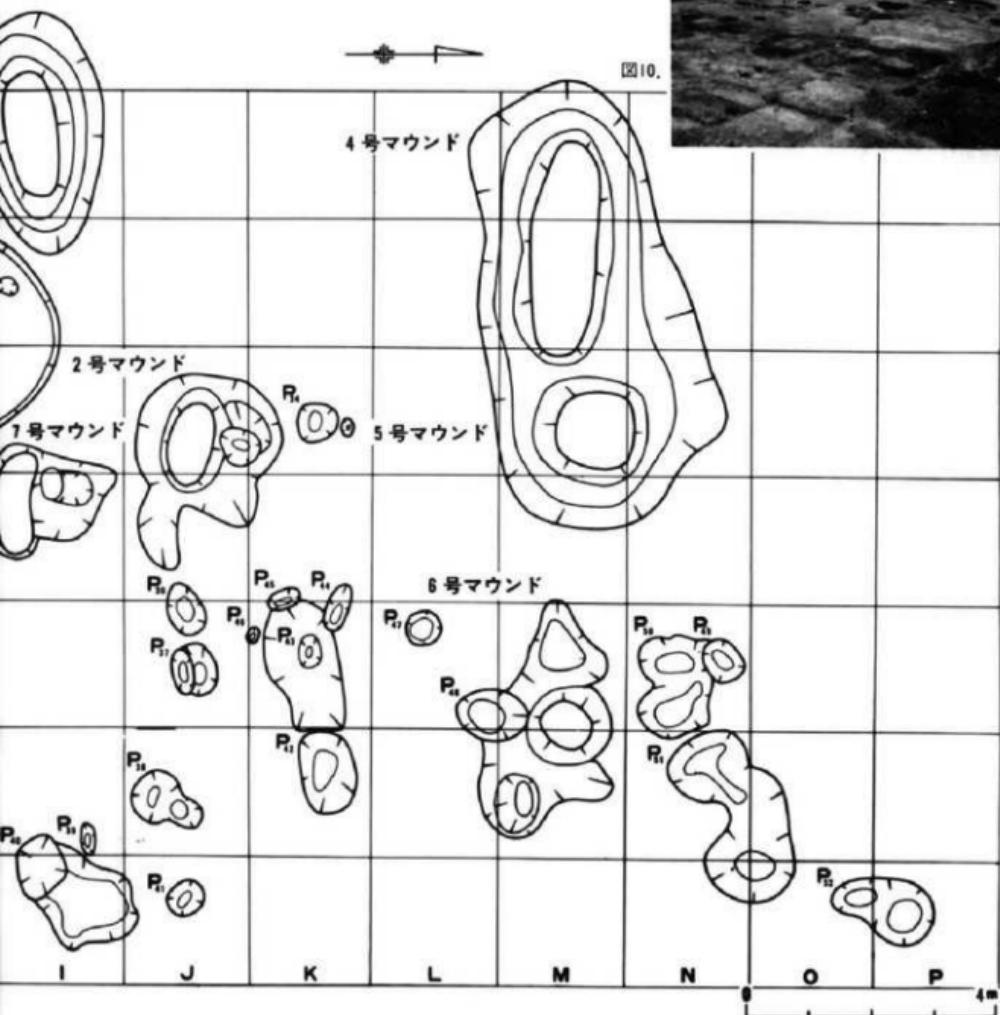
図5. グリッドの設定

B地区 遺構の平面分布

3号マウンド



今回の調査区域は駒ヶ原遺跡の北西部にあたり、東西78m・南北25mの1950m²をA・B・C・D地区の4地区に分け、総計380個のグリッドを発掘調査した。昭和の初期の開田事業の際に、遺物の包含層が削平されてしまい、遺物の出土点数も221点と僅かなものであった。特にD地区では、1点も出土していない。その内訳(P22参照)は、縄文時代前期の中越式土器に始まり、縄文中期・縄文後期・平安時代、新しくは大正時代の陶磁器破片まで、少量ずつではあるが各時代を通じて出土している。



調査の結果、遺構は、B地区にのみ集中して出土した。縄文時代前期の住居址3軒・50数個を数えるピット群・性格不明の、落ち込みを作うマウンド6基である。それらの遺構・遺物の分布状態からみると、集落が構成されていたとするならば、段丘縁辺に沿ってではなく、これらの遺構が北端となり、更に南側にのびていたのではないかと考えられる。

第1号住居址

B地区中央部、H~I・41~42グリッドにまたがる。地場層直下で落ち込みが確認され、覆土も、暗い褐色土でありロームと色調があまりかわらず、不明確な所が多かった。壁高は、現況では10~15cmを測る。床面は、黄色砂質層を基盤としており、あまり踏み固められていない。竪穴内では、P₁~P₇の7本のピットが確認されたが、P₁~P₂・P₃を柱穴とするも、東南部分には柱穴らしきものは判然としなかった。P₃の西隣には暗褐色土の混じる焼土が堆積していた。

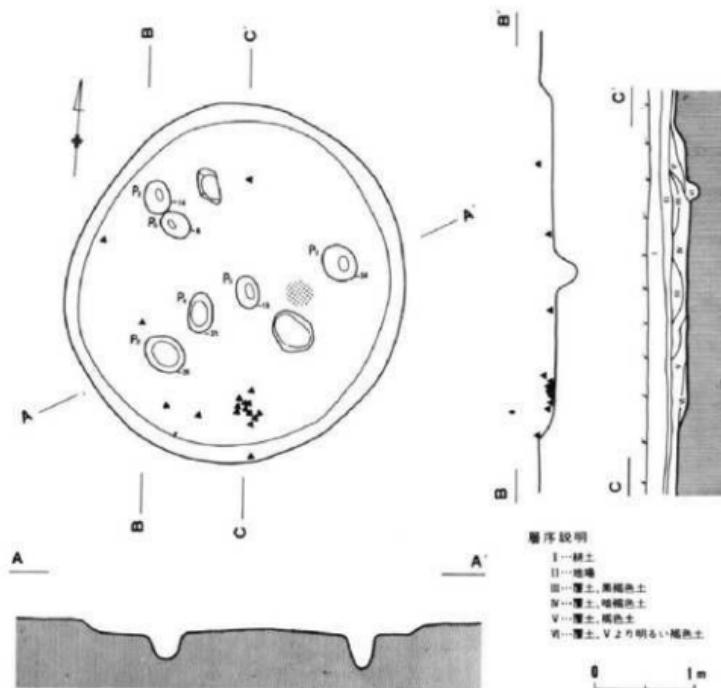


図6. 第1号住居址(1:60) (▲石器)



石器集中出土



第1号住居址出土の石器

土器は1点も出土しなかったが、第7図及び第8図の石器が何点か出土した。第8図6は長礫の先端に打撃痕のある工具、同7は緑泥質砂岩の稜部を使用しており磨り減っている。5は磨製石斧で刃部に使用痕が観察される。8は大形の礫の表皮を残す剝片に刃部が作られ、表皮の部分には一定方向のキズが残っているが、使用痕か研磨によるものか、はっきりしない。1～4は黒曜石製で、6～8は剝片の一部に簡単な刃部を設けておりスクレイパーとしての機能を持つものであろう。第7図は、黒曜石の石核で、縄文時代のものとしては、比較的形が整って残されたものである。



第1号住居址全景



第1号住居址出土の石器

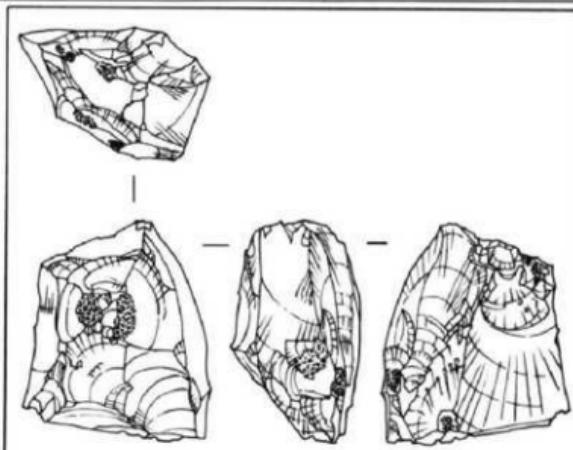


図7. 第1号住居址出土の石核

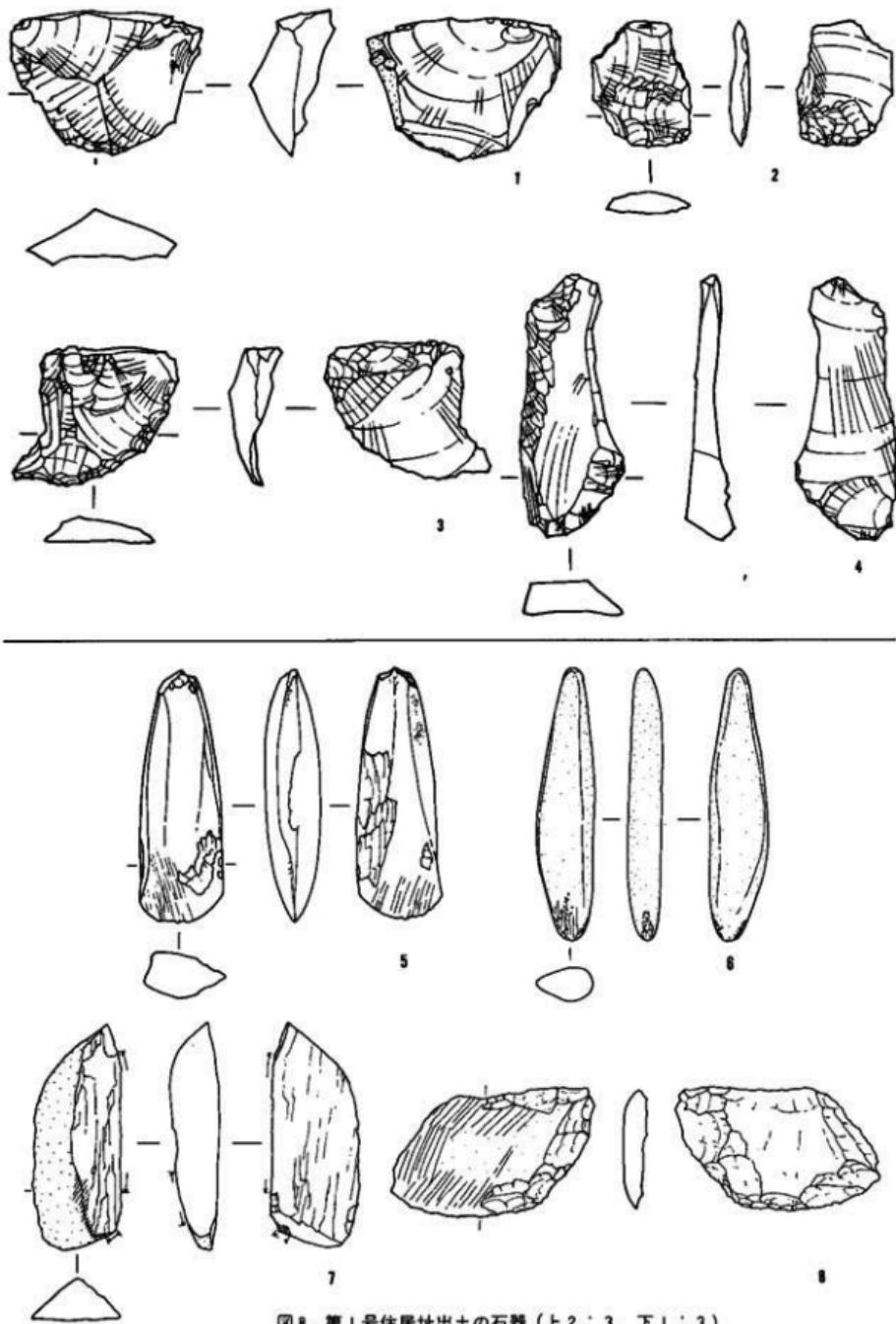


図8. 第1号住居址出土の石器（上2:3, 下1:3）

第2号住居址

調査区南側、C-D・44~45グリッドに位置する。竪穴の規模は、長径19.5m・短径18.5mの円形である。開田工事の影響のため、基盤となるローム面が削平されてしまい、現況の壁高は10cmに満たないものである。床面が全体的に締まった感じのため住居址としたが、炉などの痕跡もなく、断定はできない。R-Rの横円形のピットが穿たれおり、住居址ならばR-R-R-Rの4本柱が想定される。RはR-R間の線上にあたる。遺物は、縄文中期の石器が出土している。

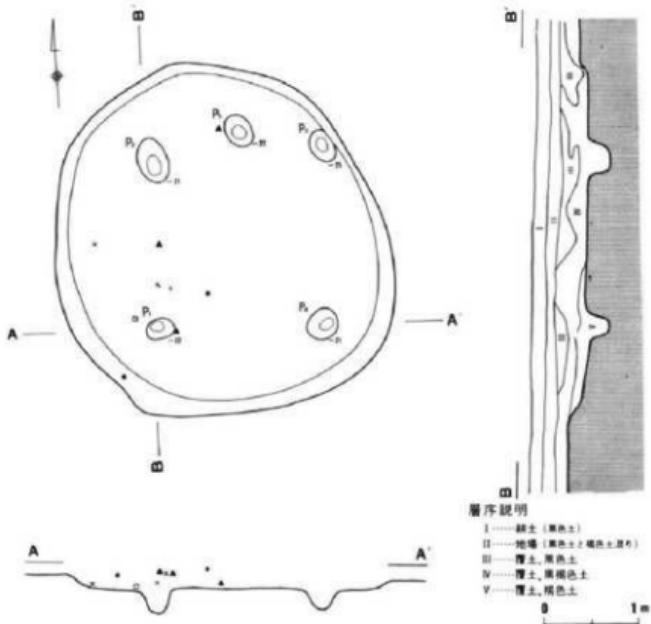


図9. 第2号住居址 (1:60) (●縄文 ▲石器 □陶器 ×土師)



第3号住居址

2号住居址の南側、A～B・44～45グリッドにまたがっている。B-43グリッドを掘り下げる段階で存在が確認された。竪穴の覆土の色調は黒褐色土であり、褐色土のロームと見分けがつくものの、水田による搅乱をうけ、プラン確認の困難な調査であった。規模は長径4m・短径3mで、楕円形の竪穴である。僅かに南東に傾斜する床面は軟弱であり、B-43の4本のピットが穿たれていた。R・R・Bを柱穴とするも、東南部分には確認されていない。土層も3層が単純に堆積しており、遺物もなく、住居とするには問題があるかもしれない。

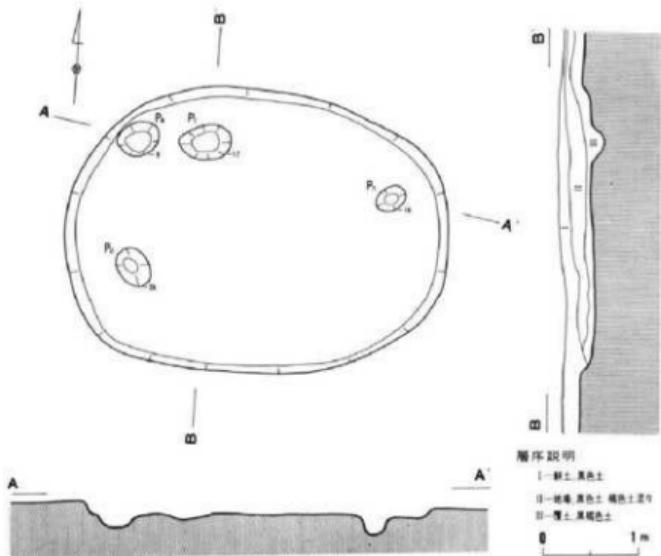
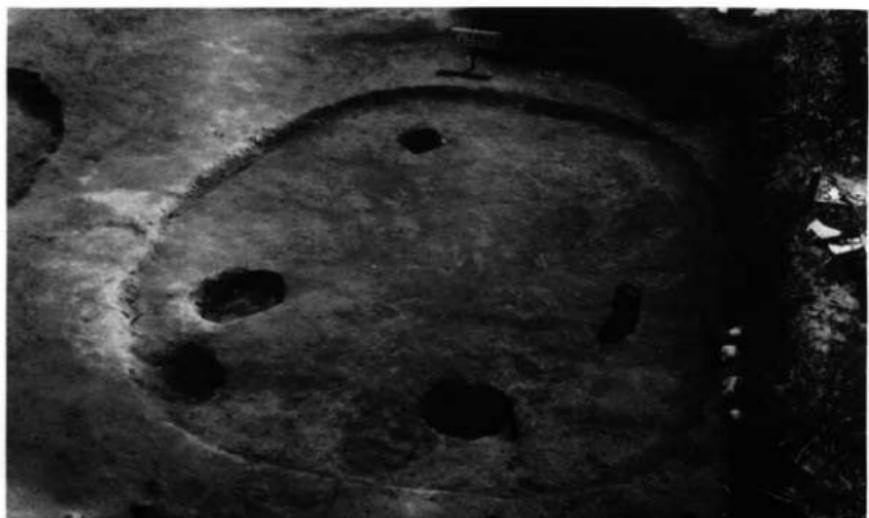


図10. 第3号住居址(1:60)

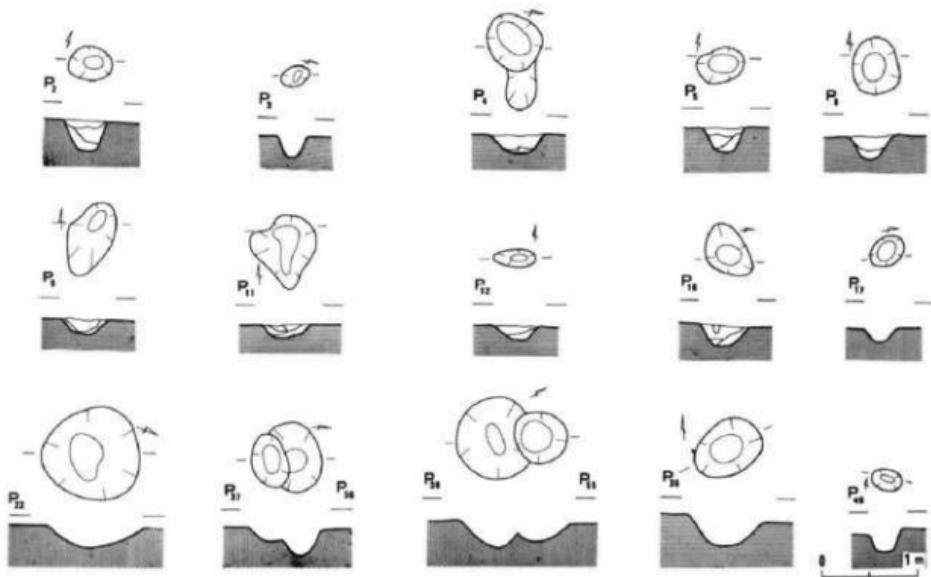


ピット群

B地区全域にまたがって、56個のピットが確認された。一応その分布状態から、1号マウンドの西側、B・C・D・E-41・42・43グリッドにまたがる1群と、E-P-42～46グリッドにまたがり、環状に分布する1群とに大別できる。西側の一群は、比較的小形のピットが集中するも、その配列に規則性は見られない。東側のピット群は、2号・6号・7号マウンドとともに環状を描く。ピット内からの遺物はなく、これらのピット群の性格は判然としない。



西側にあるピット群



図II. ピット群(1:60)

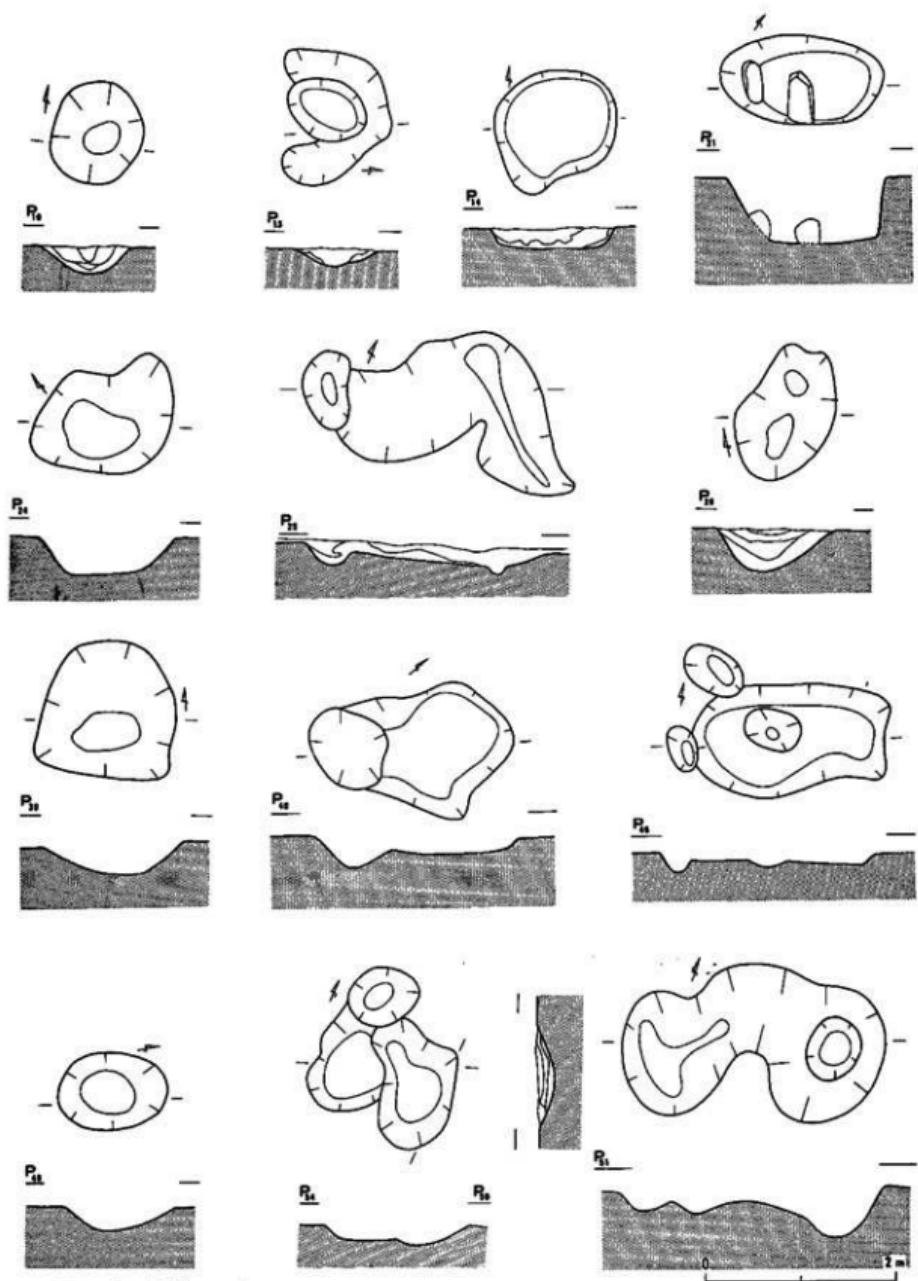


図12. ピット群(1:60)

表1. ピット一覧表

ピットNo.	平面形	規模(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	平面形	規模(cm)	深さ(cm)
1	円形	3.2×	3.9	2.9	橢円形	5.2×	4.4
2	精円形	4.6×	3.4	3.0	不整橢円形	1.46×	1.38
3	△	3.2×	2.2	3.1	△	2.6×	3.2
4	△	6.0×	5.4	1.5	△	3.0×	2.8
5	△	5.0×	3.6	2.4	△	3.0×	2.6
6	△	7.4×	5.8	1.4	△	6.8×	6.2
7	△	5.6×	5.6	1.8	△	2.8×	2.0
8	△	6.0×	4.8	2.4	△	7.4×	5.4
9	△	8.2×	4.0	1.5	△	7.2×	5.4
10	△	1.06×	9.6	2.1	△	8.4×	8.2
11	円形	7.8×	7.0	1.2	△	5.8×	2.8
12	不整円形	4.4×	1.8	1.9	△	9.2×	7.6
13	△	8.8×	6.4	1.6	△	6.2×	4.2
14	△	1.40×	1.10	1.5	△	1.38×	8.2
15	△	5.8×	4.6	1.5	△	6.0×	4.2
16	△	6.0×	4.2	2.0	△	6.8×	4.2
17	△	4.0×	2.8	3.1	△	5.0×	3.0
18	△	7.2×	4.8	1.7	△	3.2×	2.2
19	△	5.8×	5.0	—	△	6.0×	5.4
20	△	1.14×	8.6	1.0	△	1.18×	8.0
21	△	1.72×	9.0	6.7	△	7.6×	6.0
22	△	1.02×	9.6	2.1	△	1.40×	7.6
23	△	7.8×	5.4	2.1	△	2.76×	1.56
24	△	1.66×	1.20	3.5	△	1.18×	1.00
25	△	8.0×	4.6	1.2	△	8.0×	5.4
26	△	2.04×	1.02	2.1	△	8.2×	7.8
27	△	1.22×	7.0	1.0	△	5.8×	5.2
28	△	1.48×	9.0	4.4	△	5.8×	3.6

落ち込みを伴うマウンド群

いわゆるローム・マウンドの存在が知られてから久しいが、いまだにその性格は判然としない。風倒木によるものとする見解、或いは墓地とする見解、更に、粘土採取によると考える見解などがある。駒ヶ原下遺跡の場合、落ち込みを伴うマウンドは7基あり、いずれも遺物を伴出せず、人為的という印象は受けないものであった。

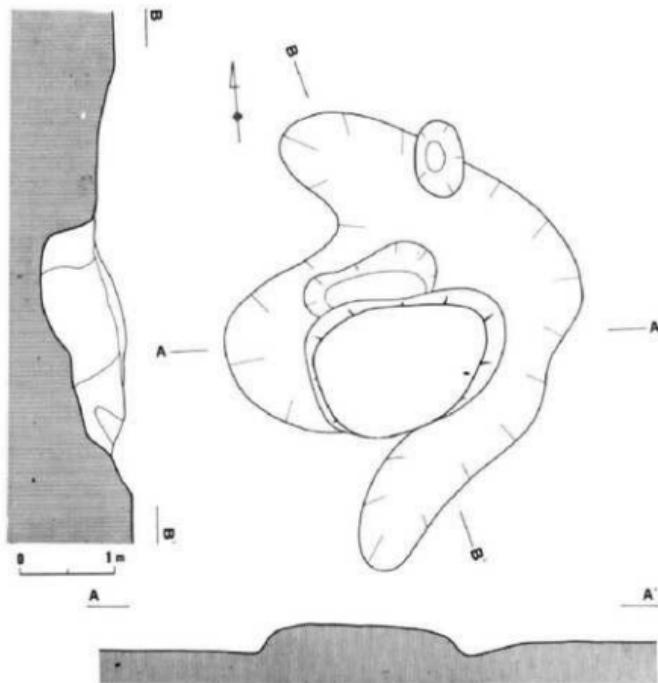
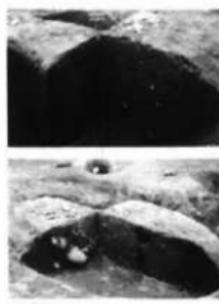


図13. 1号マウンド (1:60)



1号マウンド



断面

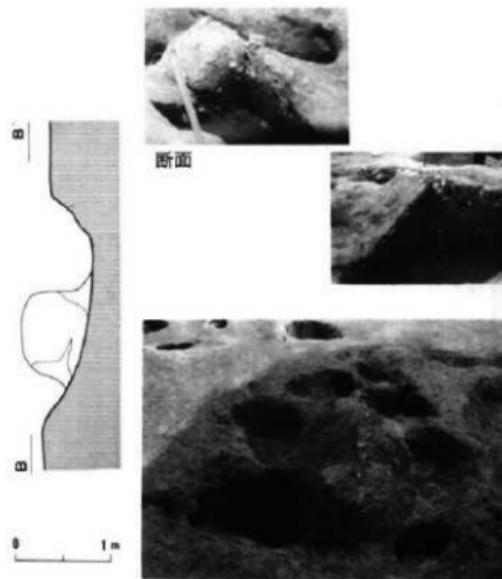
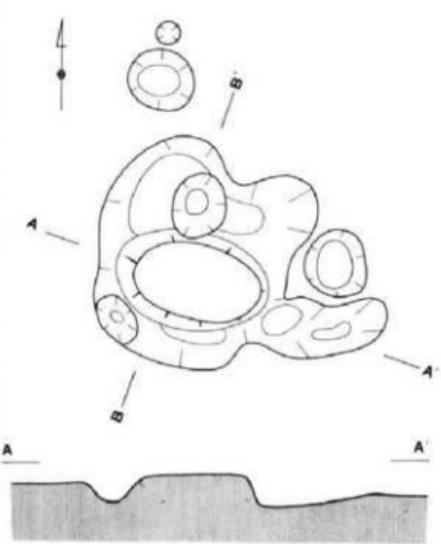


図14. 2号マウンド(1:60)

2号マウンド

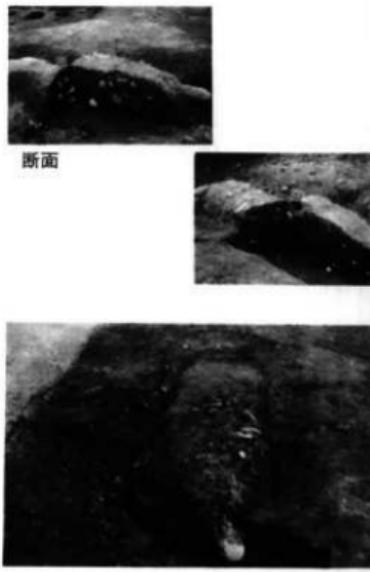
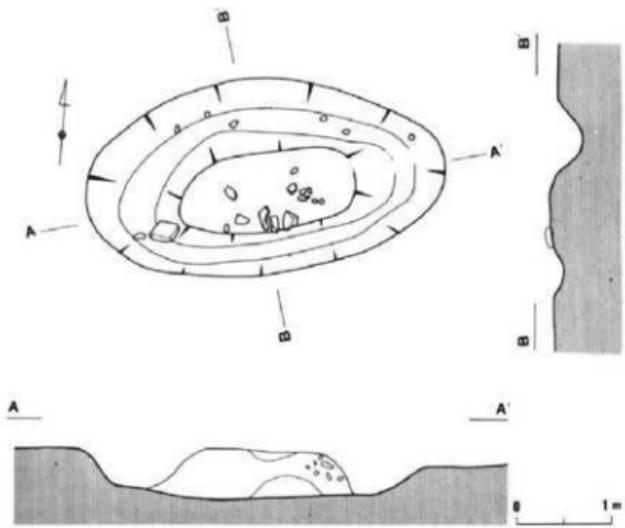


図15. 3号マウンド(1:60)

3号マウンド

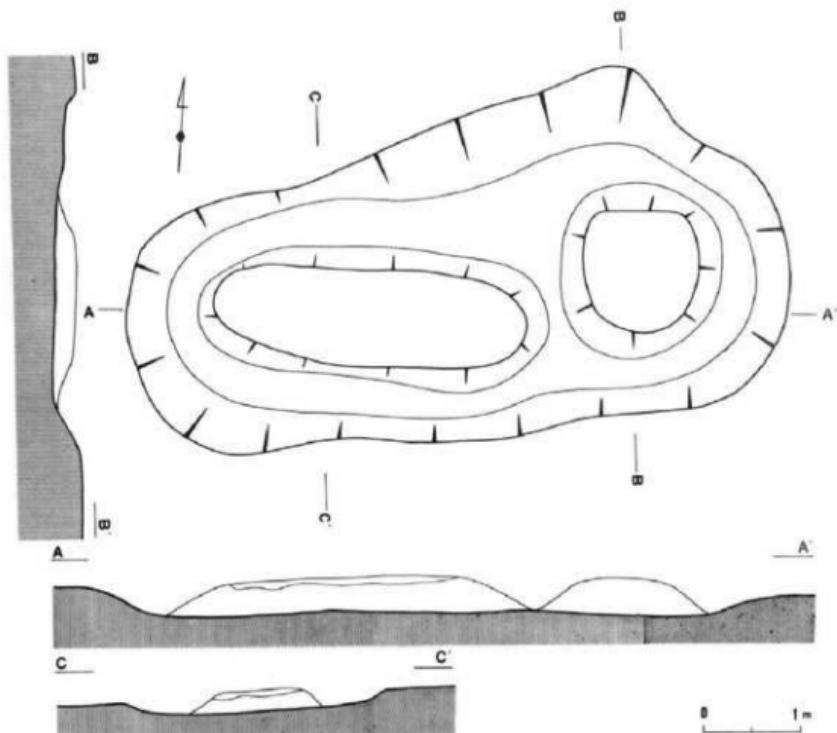
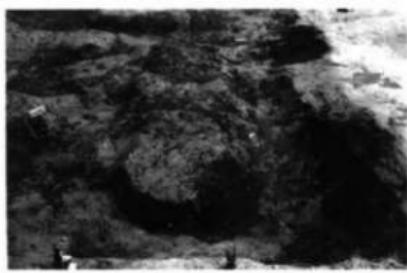
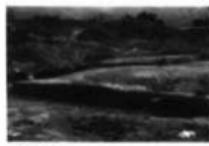


図16. 4号・5号マウンド(1:60)



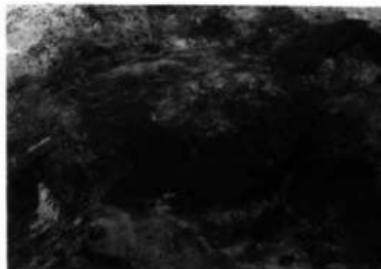
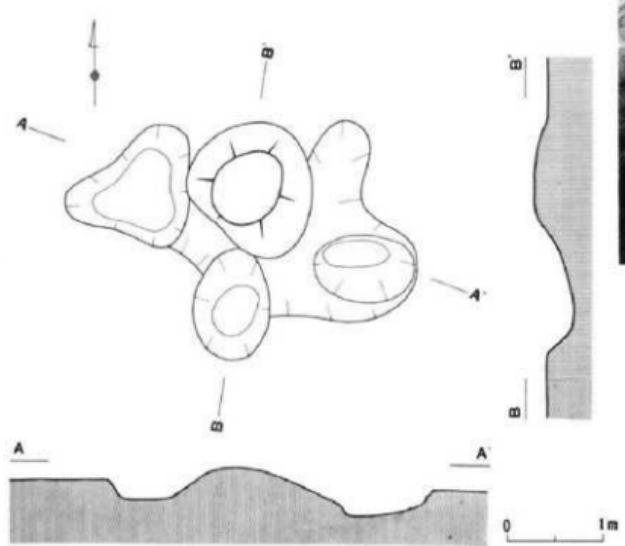
4・5号マウンド



断面

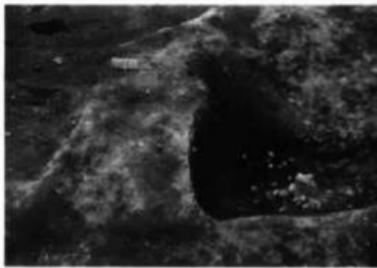
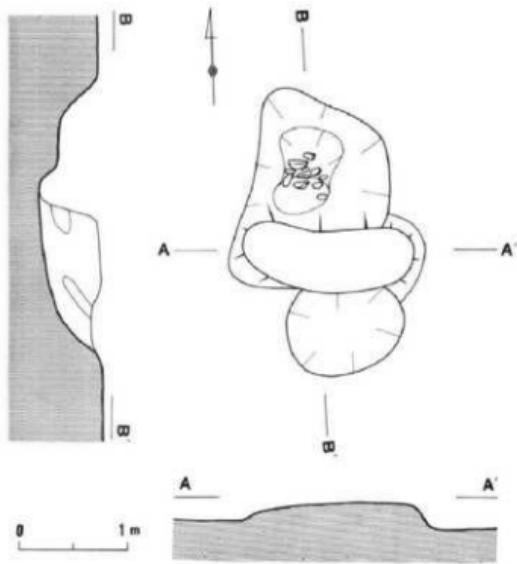


断面



6号マウンド

図17. 6号マウンド(1:60)



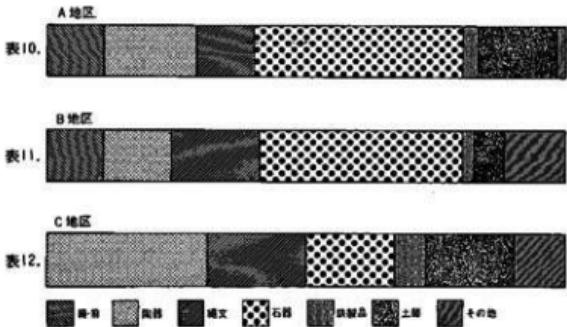
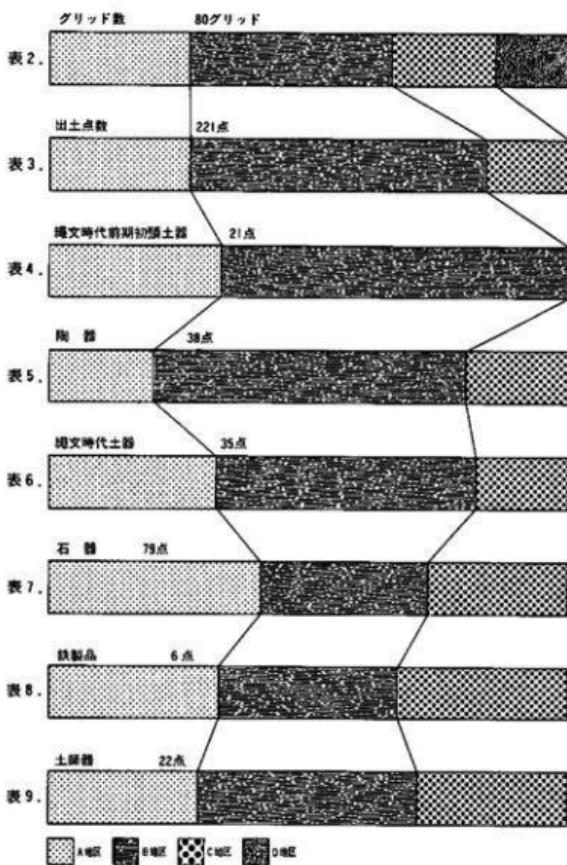
7号マウンドと断面

図18. 7号マウンド(1:60)

出土遺物の内訳

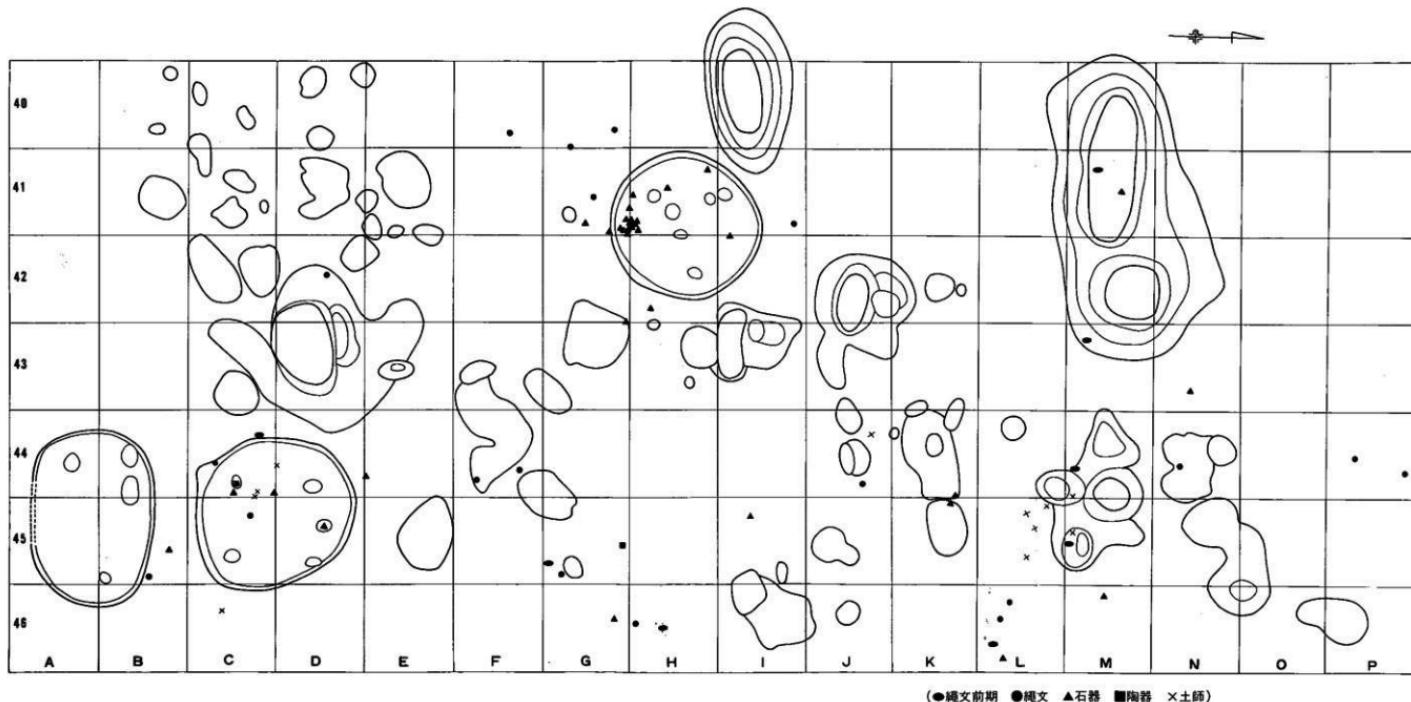
前述のように、昭和の初めの開田工事により、調査区域の遺物包含層は破壊されており、遺物の総数も221点と極めて少ない。特に、D地区はローム面まで完全に削平されており、1点の遺物も認められなかった。(表3)

地区毎の遺物の分布状態をみると、(表10・11・12) A地区・B地区の石器の割合が多いが、これは、A地区・B地区に縄文時代前期の土器が出土していることから、この石器の出土によるものと思われる。



出土品の内訳

B地区 遗物平面分布



(●縄文前期 ●縄文 ▲石器 ■陶器 ×土師)

遺構外から出土した遺物

(1) 遺構外からは縄文時代前期・中期・後期の土器・石器、平安時代の土師器・須恵器・灰釉陶器とそれ以降の時代の各種陶磁器が出土した。その出土量は極めて少量で、またその分布も希薄であった。

図19(図版2・3)に示した土器はいずれも縄文時代前期のもので、図19-1・2(図版2-2・3)の繊維を含んだ厚手の土器以外は、厚さ3~4mmの薄手のものである。厚手の1・2はいずれも表面に縄文施文がされており、3は羽状縄文となっている。また、この2点の内面の整形は丁寧なみがきが行なわれており、関山式土器の破片かと思われる。薄手のものは無文のものが多い。施文されているものには、細い沈線が斜行または交差するもの(図19-3・4、図版2-4・5)、頸部と思われる部分に薄い隆帯を貼りつけ、その上に押捺を加え、隆帯に沿って条線が引かれてるもの(図19-5、図版2-6)などがある。図19-9は口縁部破片で、口唇上には刻目がある。これらの薄手の土器は硬く焼きしまっており、内面には成形時の指痕が残っているものもある、繊維を含み、内面を整形した厚手の土器とは対照的である。

図20-1~4(図版4-2・3・4・7)は縄文時代中期初頭~前半の土器で、図48-4はいわゆる半削竹管による平行線が引かれており、「平出III A」と呼ばれてきたものである。図48-5・6は沈線で区画された中に、わずかに縄文が施文されるもので、後期初頭の土器かと思われる。

遺構外から出土した石器は、いわゆる打製石斧が最も多く(図22、図版1)、その外には、石鎌・スクレイバー・石錐・砥石(図21、図版1)などが出土した。石鎌は、4点の内1点は頁岩を用いており(図版2-1、図版1-4)、縄文時代中期に頁岩やチャートを用いた石器が少ないことを考えれば、前期のものである可能性がある。また、図版28-5の石器は、黒曜石のフレイクの一部に抉りをつけた特徴的なもので、中越遺跡をはじめとする前期初頭の遺跡から多く出土している。図版1-6・7は簡単な刃部を作出したスクレイバーである。打石斧は、図22-2のように、先端部よりも両側縁の一部が磨滅したもの、主として先端部が磨滅し、筋になった何本もの使用痕を残すもの(図22-1)。それに、石器の全体が磨滅しているもの(図22-3)などがある。多くは硬質の砂岩を用いており、またいわゆる自然面を残している打製石斧が多いことから、河原の大形礫の表面とそれに近い部分を材料として製作されたものと思われる。図21-5は砥石の破片で、中・近世のものであろう。

(2) 陶器

駒ヶ原下遺跡からは、少量ずつではあるが、各時代を通じての陶磁器破片が出土している。それらの遺物と関連があると思われる遺構は、確認されなかった。その生産された時代差により、下記のように6分類できると思われる。

1類(1~3)須恵器 産地は猿投古窯であり、平安時代のMT-5期にあたる。

2類(4~16)白磁 やはり猿投古窯のものであり、平安時代後期の黒笠90号

3類(17~20)天目茶碗 産地は古瀬戸 時期は室町時代

4類(21)灰釉の碗 産地は瀬戸 江戸時代のもの

5類(22~26)染付 産地は瀬戸 時期は明治~大正

6類(27~31)白磁 産地は瀬戸 時期は明治~大正

(友野)

(赤羽)

陶磁器調査表

番号	出土番号	名称	調製	产地	時期
1	182	須恵器 盆	ロクロ	猿投	平安
2	214	須恵器 盆底部	ロクロ	猿投	平安
3	56	須恵器 盆	ロクロ	猿投	平安
4	195	白瓷 盆口縁部	ロクロ無釉	猿投	平安後期
5	196	白瓷 盆口縁部	ロクロ施釉	猿投	平安後期
6	192, 194	白瓷 盆口縁部	ロクロ施釉	猿投	平安後期
7	198	白瓷 碗口縁部	ロクロ施釉	猿投	平安後期
8	240	白瓷 碗	ロクロ施釉	猿投	平安後期
9	107	白瓷 碗	ロクロ施釉	猿投	平安後期
10	193	白瓷 碗	ロクロ施釉	猿投	平安後期
11	18	白瓷 碗	ロクロ施釉	猿投	平安後期
12	103, 74	白瓷 壺	ロクロ施釉	猿投	平安後期
13	97	白瓷 壺	ロクロ施釉	猿投	平安後期
14	106	白瓷 盆底部	ロクロ施釉	猿投	平安後期
15	101, 108	白瓷 壺	ロクロ施釉	猿投	平安後期
16	117	白瓷 壺	ロクロ施釉	猿投	平安後期
17	146	天目 茶碗	ロクロ施釉	瀬戸 宝町	
18	53	天目 茶碗	ロクロ施釉	瀬戸 宝町	
19	11	天目 茶碗	ロクロ施釉	瀬戸 宝町	
20	163	天目 茶碗	ロクロ施釉	瀬戸 宝町	
21	46	灰釉 盆		瀬戸 江戸	
22	149	染付 盆		瀬戸 明治	
23	179	染付 盆		瀬戸 大正	
24	148	染付 茶碗		瀬戸 大正	
25	156	染付 徳利		瀬戸 大正	
26	178	染付 盆		瀬戸 大正	
27	54	白磁 茶碗		瀬戸 明治	
28	170	白磁 茶碗		瀬戸 大正	
29	144	白磁		瀬戸 大正	
30	153	白磁		瀬戸 大正	
31	164	染付 碗		瀬戸	

IV 調査のまとめ

——縄文時代前期の諸問題——

駒ヶ原下遺跡で発掘された第1号住居址を中心として、縄文時代前期に関するいくつかの問題点を指摘して、調査のまとめとする。

石器製作について 駒ヶ原下遺跡第1号住居址からは石器が出土したのみであったが、出土した石器の特徴・住居址の形状及び周辺から出土した土器などからすれば、この住居址は縄文時代前期のものであると考えられる。出土した石器は、黒曜石の石核を中心にして石器製作の痕跡を示すものである。住居址の南端寄りから、石核・剥片とともに、恐らく石器製作に使用されたであろう棒状の礫器（ハンマー・ストーン）が集中出土しており、住居内における手工業生産の場と深い関係があるものと考えられる。住居址内的一部に剥片など石器製作に関わる遺物が出土した例は、このころの時期の遺跡として、宮田村駒ヶ原南遺跡（註1）・同中越遺跡（註2）・諏訪郡原村阿久遺跡（註3）などがあるが、集落内のすべての住居址から出土するわけではないらしい。

一方、先端に敲打痕のある棒状の礫器は、中越遺跡で大量に出土しているのをはじめ、駒ヶ原南遺跡と今回の駒ヶ原下遺跡では、剥片などが集中して出土する住居址内から出土しているわけで、特に駒ヶ原下遺跡第1号住居址からは、黒曜石の石核・剥片・棒状の礫器が、微視的な分布から見てもそれぞれ「伴った」状態で出土している。従って、この棒状の礫器は、石器製作に関わる石器——ハンマー・ストーンであろう。なお、駒ヶ原下遺跡第1号住居址の場合、この石器の集中出土箇所に近いところに、焼土と、硬質砂岩の比較的扁平な大形の円礫が出土しており、特に、円礫は火熱を受けた痕跡と敲打痕が認められており、石器製作に際しての加工台としての性格を持つものと考えられる。このような、大形で扁平な円礫が出土した例として、駒ヶ原南遺跡（第7号住居址の竪穴外の壁際から出土。註1）・中越遺跡（第56号住居址など。註1・註2）・阿久遺跡（註3）などがあり、箕輪町大原遺跡（註4）第6号住居址（諸礫式土器？出土）からは、駒ヶ原下遺跡第1号住居址と同様火熱を受け、打撃痕のある礫が出土している。これらの円礫は住居址内の地床炉の近くにあることが多い。（註5）住居内における手工業生産の場として、炉の周辺が意識されていたものと思われる。

石器の器種組成について 駒ヶ原遺跡第1号住居址から出土し、明確にその位置づけができる石器組成は、石核・ハンマーストーン・剥片・わずかなノッチのある剥片・スクレイパー・磨製石斧である。しかし、そのほか遺構外からは、石錐・抉りのある剥片・打製石斧などが出土しており、中期的形態を示す打製石斧以外は、この第1号住居址と時期的に合致するものもあるかと思われる。従って、駒ヶ原下遺跡及びこれと時期的に同時かあるいは近接するいくつかの遺跡の石器の大略の器種組成を示せば第13表のようである。この表によれば、少なくとも伊那谷北半（天竜川上流域）において石器の器種組成の上では、縄文時代早期末～前期初頭にかけてあまり大きな変化はないものと言える。ただし、特殊磨石と呼ばれている石器は、押型文土器を出土した箕輪町大原遺跡（註4）や木島I式土器（註6）を出土した飯島町カゴ田遺跡（註7）で組成の一部となることが確認されたが、次の中越期（註8）には、器種組成の上から消えていることが注意される。

集落について 一方、カゴ田遺跡から中越遺跡にかけての間に、住居の定形化・集落の大形化に伴って、出土する遺物の絶対量は増えており、その点に注目すれば、早期～前期という大きな画期であったことがわかる。しかし、それにしても、駒ヶ原南遺跡・駒ヶ原下遺跡から出土した前期の土器が、中越遺跡の存続した期間に含まれるとすれば、縄文時代の集落論・領域論などに大きな問題を投げかけることになる（註1）。早期末～前期という時期に集落の大形化・遺物量の増加をもたらしながらも、駒ヶ原南遺跡・駒ヶ原下遺跡という、集落の規模・住居の形状・遺物量などの点において極めて貧弱な遺跡がなぜ残されたのだろうか。木島I式土器（塙屋式土器）を出土する遺跡は、近年になって飯島町カゴ田遺跡をはじめ、相次いで発掘されており（註9）、それはいずれも比較的の規模の小さい遺跡で、各地に点在していたことがうかがえる。同じ小規模の遺跡であっても、駒ヶ原南遺跡や駒ヶ原下遺跡は、一方に中越遺跡があるわけで、前記の早期末のいくつかの遺跡と同様のものかどうかは疑わしい。中越遺跡に対する駒ヶ原南遺跡・駒ヶ原下遺跡との関係は、たとえば八ヶ岳山麓においては、阿久遺跡と茅野和田遺跡との関係にも似ているようであり、そういう点からも、今後は領域論なども考慮しながら、発掘された数多くの遺跡を群としてとらえ、グルーピングしていくことが必要と思われる。

(赤羽)

註1 友野良一ほか「宮田村駒ヶ原南遺跡発掘調査報告書」昭和53年 宮田村教育委員会
友野良一・赤羽義洋「移動生活と中越遺跡」「どるめん」16号 昭和53年

註2 藤沢宗平ほか「中越遺跡発掘調査概報」昭和44年 宮田村教育委員会
藤沢宗平ほか「中越遺跡発掘調査概報」昭和45年 宮田村教育委員会

註3 藤沢浩ほか「阿久遺跡発掘調査概報」昭和53年 長野県中央道遺跡調査団

註4 友野良一ほか「大原遺跡発掘調査報告書」昭和53年 笠輪町教育委員会

註5 長崎元広（「中部地方における縄文前期の堅穴住居」「信濃」31-2 昭和54年）による「添石炉」と系譜的に直接つながるものかどうか明らかでない。

註6 最近、木島I式・II式のとらえ方に混乱が多く、ここでは木島I式を塙屋式と同タイプのものとして考えたい。

註7 友野良一ほか「カゴ田遺跡緊急発掘調査報告書」昭和53年 飯島町教育委員会

註8 中越遺跡の存続した期間で、花積下層式期～関山式期に当たる。

註9 駒ヶ根市舟山遺跡（昭和46年、47年発掘）・伊那市南村遺跡（昭和53年発掘）・同内城遺跡（昭和53年発掘）・高遠町宮の原遺跡（昭和52年発掘）・南笠輪村北高根遺跡（昭和47年、50年発掘）など。

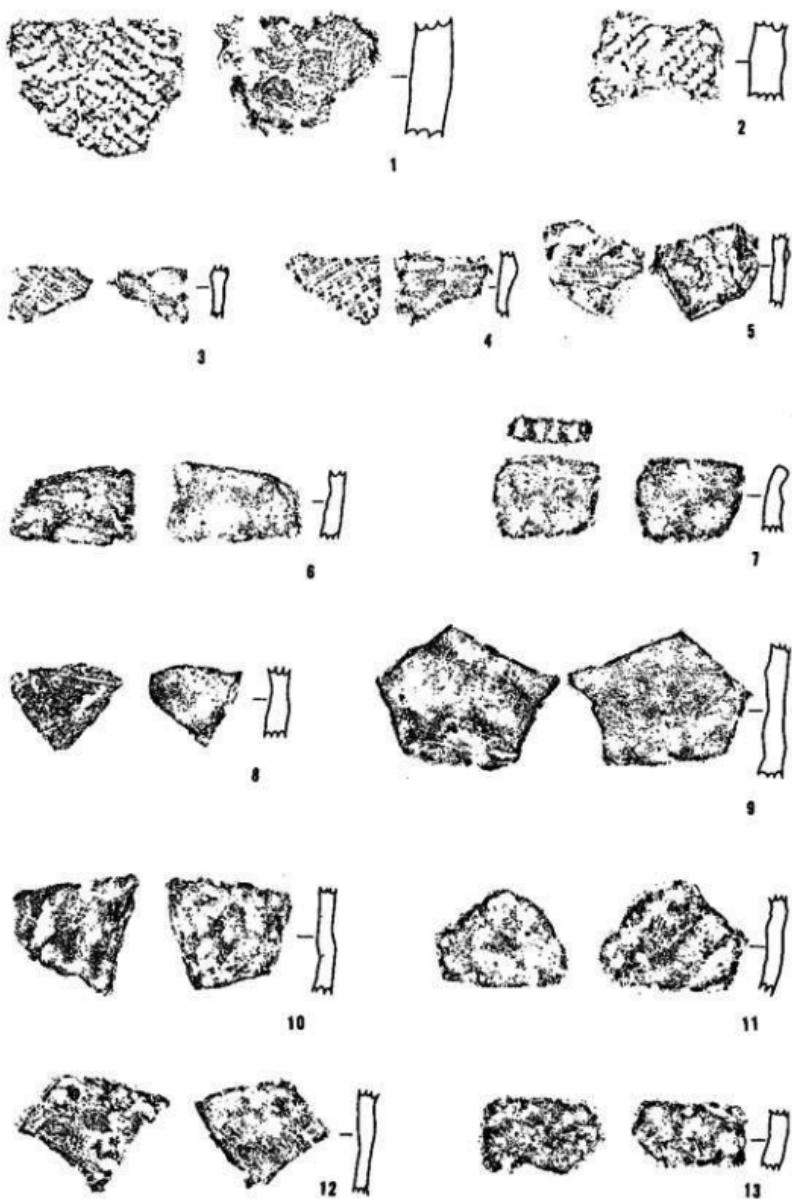


図19. 繩文時代前期の土器(2:3)

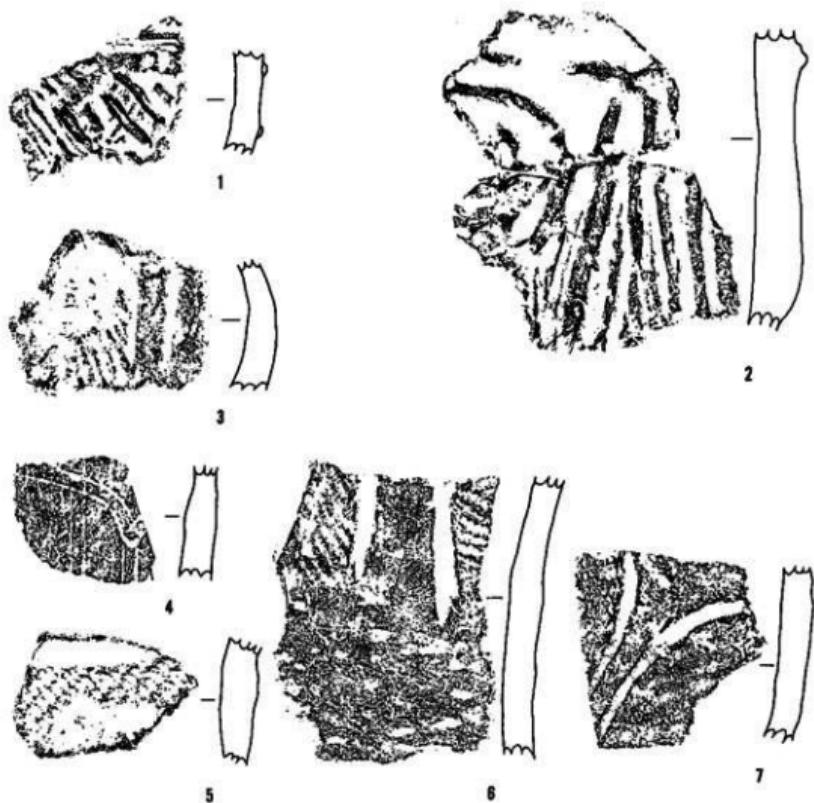


図20. 繩文時代中期・後期の土器 (2:3)

表13 繩文時代早期末及び前期初頭の主な石器の器種組成

器種 遺跡	縛	スレ イバー	打製石斧	石 刀	磨製石斧	棒状器 (...スティック)	円形器	特殊磨石	臼 石	石 核	ドリル
カゴタ遺跡 (早期末)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	?	○
中越遺跡 (前期初頭)	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○
駒ヶ原南遺跡 (前期初頭)	○	○	?			○	○				
駒ヶ原下遺跡 (前期初頭)	○	○	?		○	○					

(○印は多量出土。?は不明、無印は出土なし)

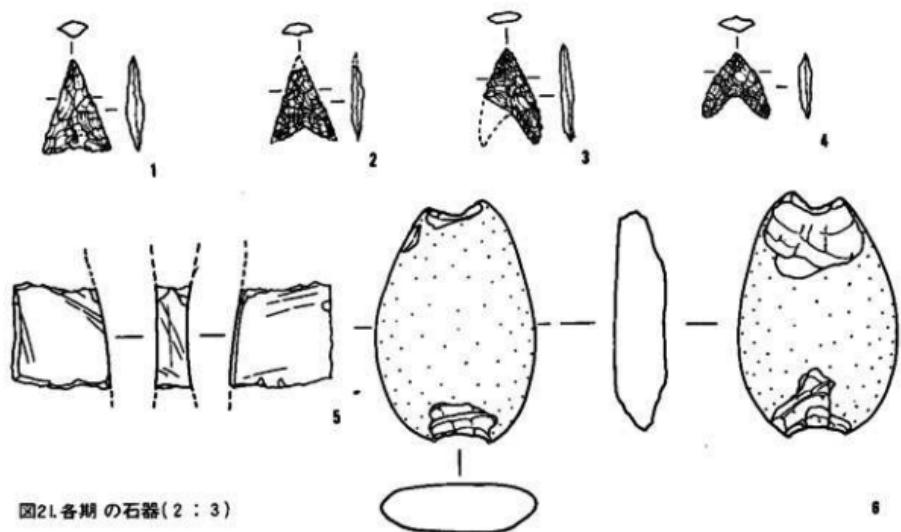


図21.各期の石器(2:3)

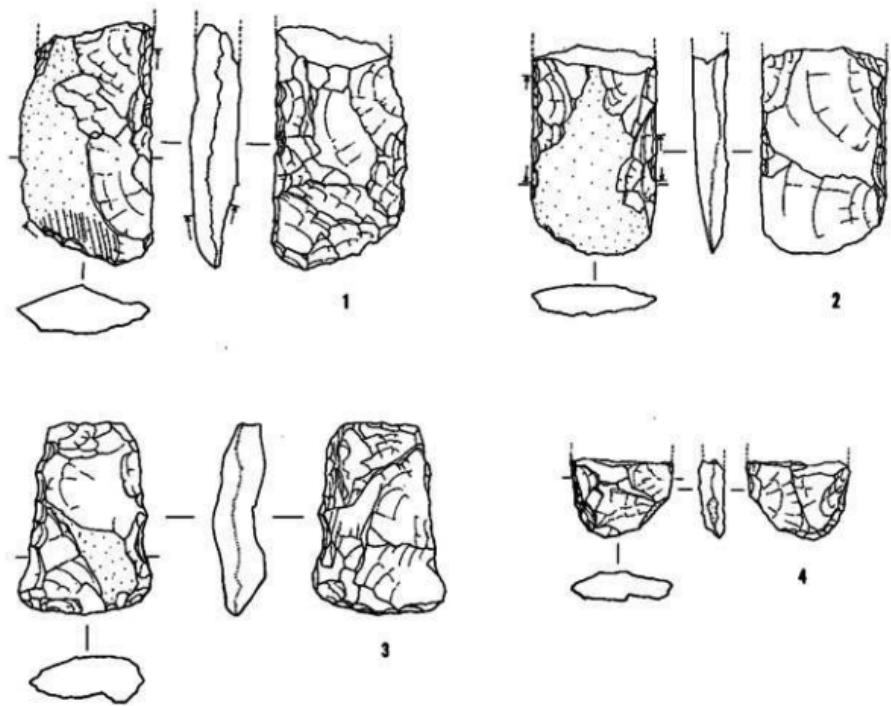
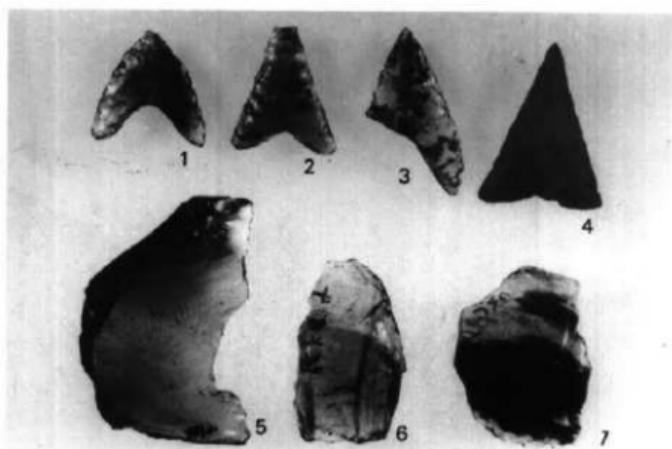
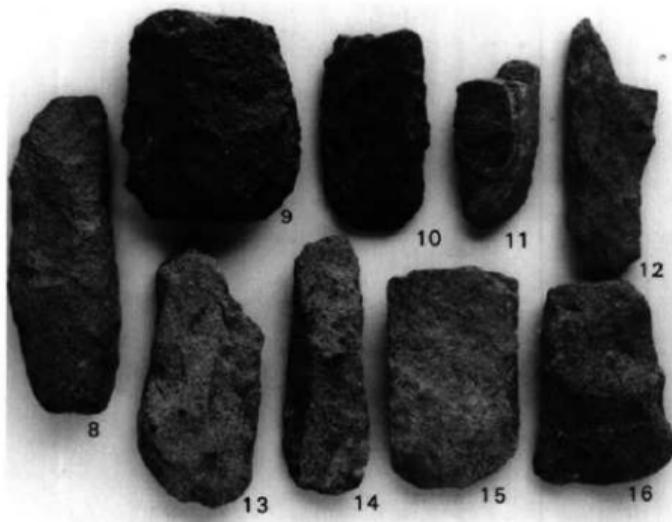


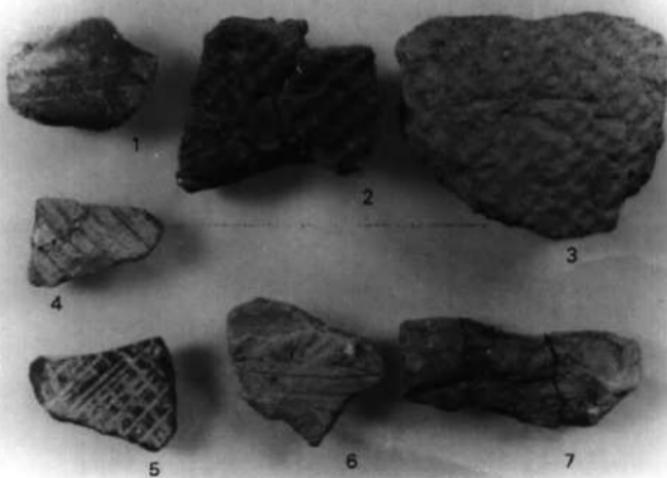
図22.各期の石器(1:3)



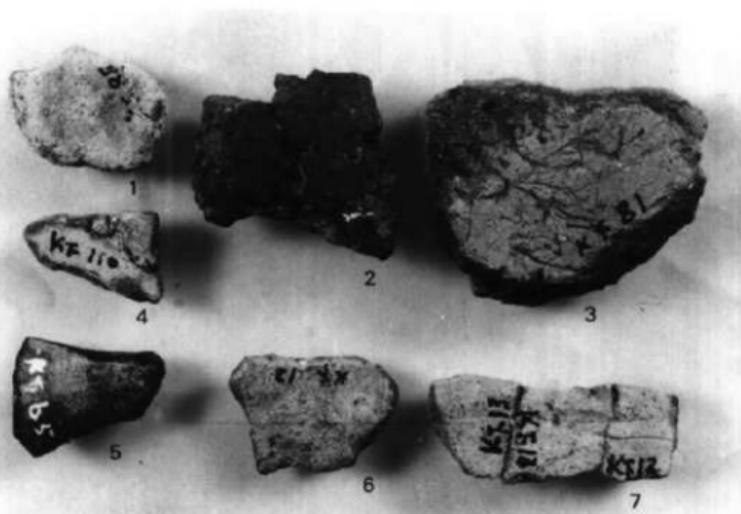
▲各期の石器



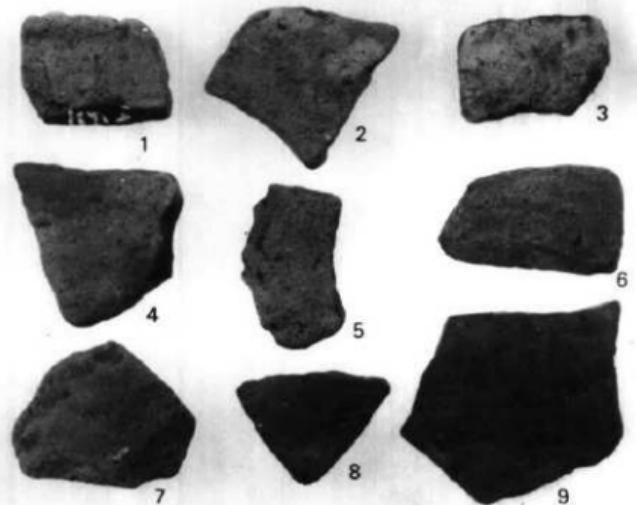
▲各期の石器



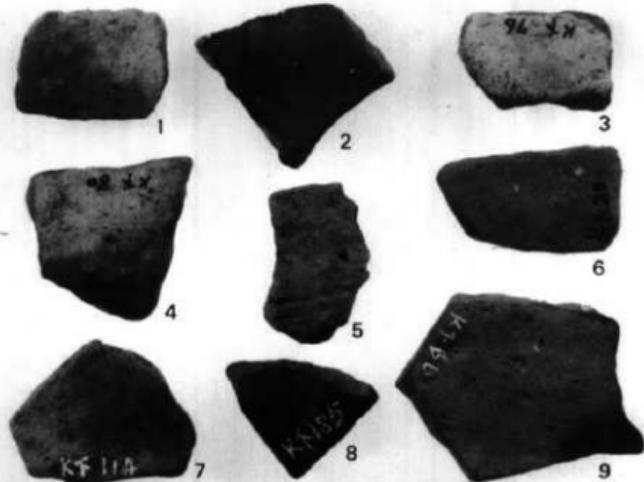
▲縄文時代前期初頭の土器（表）



▲縄文時代前期初頭の土器（裏）

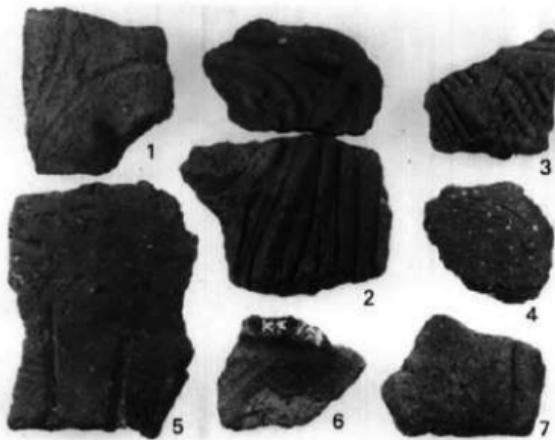


▲縄文時代前期初頭の土器（表）

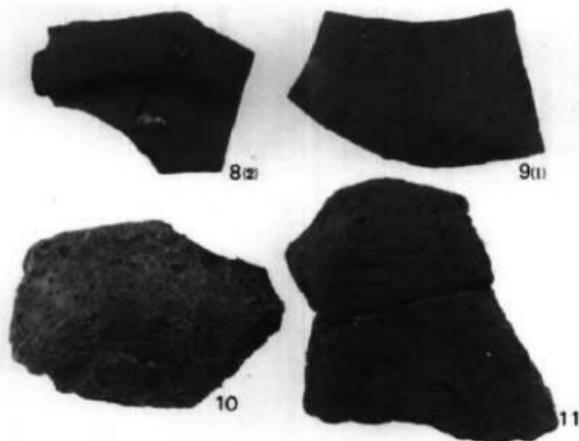


▲縄文時代前期初頭の土器（裏）

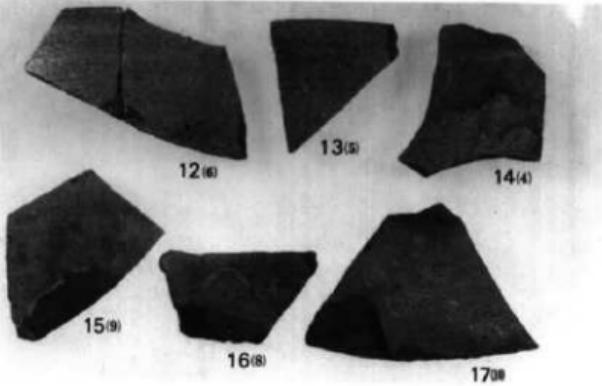
◀縄文時代中・
後期の土器



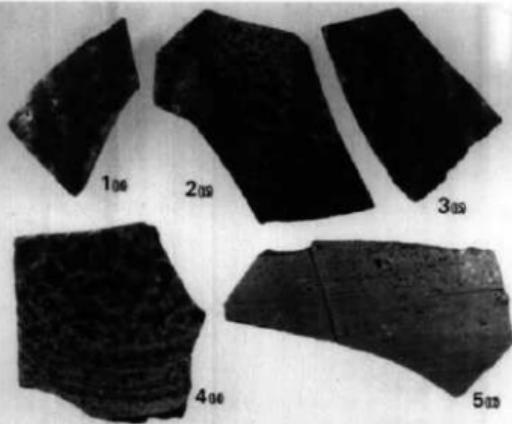
◀土器と須恵器



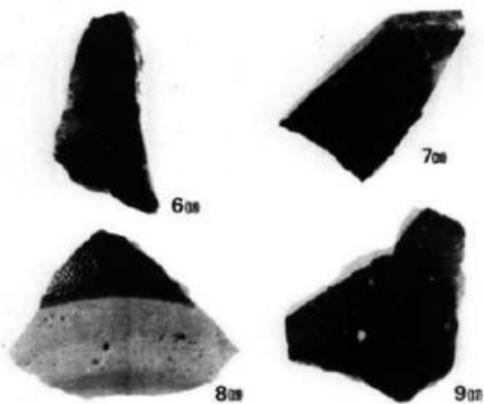
◀灰釉陶器



◀古瀬戸灰釉



◀古瀬戸天目茶碗



◀染付



IV. おわりに

駒ヶ原下遺跡は、宮田村駒ヶ原地籍に所在する。地理的には、木曾山脈駒ヶ岳に源を発する大田切川の支流である小田切川の右岸段丘上に立地する遺跡である。このほか駒ヶ原台地には、昭和27年発掘調査が行なわれた三つ塚古墳群をはじめ、県企業局が住宅団地造成に先立ち記録保存をした竜ヶ原遺跡・昭和52年度県営圃場整備事業に伴なって行なわれた駒ヶ原南遺跡（縄文時代前期初頭）・弥生時代後期の集落址と方形周溝墓2基などが発見された。今年度は、カラス林・三つ塚両遺跡と三つ塚古墳群の調査が行なわれた。昭和54年度には、三つ塚遺跡の西方にある駒ヶ原上遺跡の発掘調査が予定されている。そのほか駒ヶ原台地には、未調査の多くの遺跡があったと思われるが、大規模な圃場整備工事の前には何等の保存処置もこうずることができず消滅し去ったことは誠に残念なことである。

本遺跡の問題点となる縄文時代前期初頭における石器製作・石器の器種組成・集落等については、IVまとめで担当者が論究している。

尚、報告書作成にあたっては、各調査員、学生、村民の方々の御協力を得た。また、発掘調査、整理期間を通じて南信土地改良事務所担当者、宮田村教育委員会に多大な援助をいただいたことを心から御礼申し上げる次第である。

駒ヶ原下遺跡

発掘調査報告書

昭和54年3月15日 印刷

昭和54年3月18日 発行

発行所 長野県上伊那群宮田村
教育委員会

印刷所 長野県諏訪郡下諏訪町広瀬町
株式会社印刷

